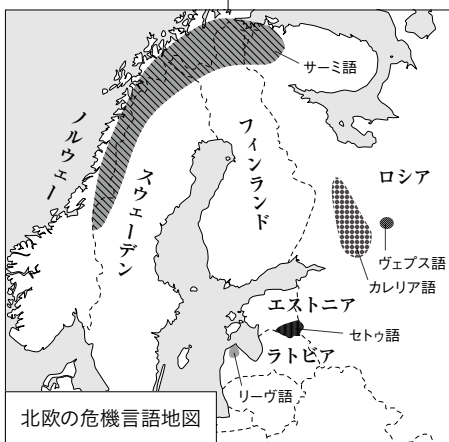


危機言語は救えるか

しょうじ ひろし
庄司 博史 民博 名誉教授



北欧の危機言語地図

ある言語の話者が少なくなったり、ユネスコがとりうるもつとも効果的な保護措置は、無形文化遺産リストへの記載であろう。無形文化遺産の典型である口頭伝承は、個別の言語によって担われるからだ。

危機と向かうウラル諸語

わたしはフィンランド語のほかに、同じウラル語族に属するサミー語やカレリア語、エストニア南部のセトゥ語ともかかわってきた。いずれも母語話者は数万から数千に過ぎず、今日いわゆる危機言語といわれているグループに入る。エストニア語の方言であるセトゥ語をふくめ、他の言語も話者は国家の主要語であるノルウェー語やフィンランド語、ロシア語へ急速にシフトしつつある。フィンラン

ド湾周辺には同じ系統のヴェプス語、リーヴ語などがあるが、話者数は数十人から数人で、まもなく死語になることが予想されている。

ウラル系の言語は二〇余りあるが、それらのほとんどは継承者が年々減少しつつあり、これらの研究者は、言語の将来への存続に常に危機感をもって接してきた。安泰といわれるのは、国家をもつフィンランド語、エストニア語とハンガリー語ぐらいなのだ。

言語の危機から人の危機へ

今日、存続の危機に瀕しているのは、もちろんウラル系言語に限らない。世界中で話者が急速に減少しつつある諸言語の窮状が指摘されはじめたのは、一九八〇年代末からだ。言語の減少は普通、より有力な言語へ話者が乗り換える言語交替によっておこり、必ずしも人が消滅しているわけではない。しかしそれを民族の消滅、そして個々の言語に支えられてきた世界観や知識の消滅として危惧す

る人は少なくない。たしかに今まで通じていた民族語が次第に目の前から消えはじめたことに痛みをおぼえ、祖先の智慧や文化が言語とともに消え去ることを嘆く人がいるのは理解できる。

近年、個々の言語の盛衰を環境生態学と結び付ける試みをおして、その危機意識を広め、今まで特に言語問題に関心なかった一般人の共感をよぶきっかけになった。一九九二年、リオデジャネイロで開催された地球サミットで「生物多様性条約」

が採択され、人びとの関心が生物の多様性を温存する環境に向かうことになった。まもなく生物の多様性は言語の多様性ともつながることになり、少数言語にやさしい環境は、そこに住む生物、つまり人類をとりまく環境の指標と受けとめられるようになった。

多くの報告書が発表された。世界中で消滅しようとする言語の救済策がいくつも提言され、それまで言語構造の記述に没頭していた研究者のなかにも突如、環境生態論を論じはじめたものもいたほどだ。

一九九〇年代半ばから世界中で危機言語関連のシンポジウムや調査プロジェクトが始まった。日本でも膨大な研究助成金を背景に調査プロジェクトが組まれ

多くの報告書が発表された。世界中で消滅しようとする言語の救済策がいくつも提言され、それまで言語構造の記述に没頭していた研究者のなかにも突如、環境生態論を論じはじめたものもいたほどだ。

危

危機言語のこれから

危機言語が認識され、その救済を人類の存亡や民族、個人の尊厳と関連付けて論じられるようになったのは、それほど古いことではない。それまでは何千、何万という言語が地上には生まれ、また消えていったのは間違

ない。ことばの存続に命をかける人がいる一方で、母語が消滅することに気づかず、苦痛も感じない人びとが大半なのも現実である。多くは異言語話者との通婚や同化政策を背景に主流言語に乗り換えているが、最終的には話者の言語選択によるものである。しかし選択を迫られていること、選択肢の存在さえ知らずに進むのが普通だ。そして多くの場合、現実的な選択肢は、存在しない。危機言語の救済は言語学者が考えるほど単純なことではない。



フィンランドでは1970年代にサーミ語教育が始まり1980年代にはサーミ語で全科目の授業も可能になった(1989年フィンランド、ウツヨキ)



20年前10代のカレリア語話者はすでに珍しくなっていた。夏休みに祖父母の村に帰省した子どもたち。話すのはロシア語のみ(1996年カレリア共和国、シェーメイエルピ)



年に一度のセトゥ民族祭。祭りの規模は大きくなるが若いセトゥ語話者は減少しつつある(2005年、エストニア、ミツ)